

立教大学コミュニティ福祉研究所学術研究推進資金
大学院生研究 2018年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院 コミュニティ福祉学 研究科 コミュニティ福祉学 専攻		
指導教員	所属・職名	氏名	
	コミュニティ福祉学部・教授	大石 和男	印
研究課題名	演奏不安測定尺度の作成		
研究代表者	在籍研究科・専攻・学年	氏名	
	コミュニティ福祉学研究科・ コミュニティ福祉学専攻・ 博士課程後期課程3年次	坂内 くらら	印
研究期間	2018年度		
研究経費	100千円		

研究の概要 (200~300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究の目的は、音楽を専攻する大学生を対象に、演奏不安尺度(MPAI-13)の作成を作成することであった。探索的因子分析の結果、MPAI-13は、「演奏の質に関する不安」と「演奏することに関する不安」の2因子で構成されることが示された。クロンバックの α 係数により、十分な内的一貫性が、確認的因子分析により、許容できる妥当性が確認された。加えて、MPAI-13の合計得点および各下位尺度得点と、あがり経験特徴質問紙得点、CES-D得点、感覚処理感受性得点の間には正の相関が、自尊感情尺度得点との間には負の相関が認められた。以上のことから、MPAI-13は、妥当性と信頼性を有しているものと考えられる。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[演奏不安] [音楽専攻大学生] [尺度作成]

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)**【背景】**

演奏不安は、演奏家のキャリアを終わらせる可能性のある大きな問題の一つである。演奏不安は、「公の場での演奏スキルに対する不安および（または）演奏スキルの低下を招く、持続的な苦痛を伴う経験であり、本人に才能があり訓練をしてどれほど準備をしてもそれが保障されない状況が起こること」と定義されている (Salmon, 1990)。特に、実際の演奏場面に先立って生じる不安は、パフォーマンスを低下させること、また、こうした不安の高まりによって、演奏会への出演をキャンセルせざるを得なくなる場合があることや、不正薬物等の摂取により演奏不安の低減を試みる演奏家の事例が報告されている (Wesner, Noyes & Davis, 1990; Wills & Cooper, 1988)。

演奏不安の低減方法を考案するためには、演奏不安の程度を評価する必要がある。その評価のために、Performance Anxiety Inventory (以下、PAI とする, Nagel, Himle & Papsdorf, 1989), Performance Anxiety Questionnaire (以下、PAQ とする, Cox & Kenardy, 1993) など、様々な尺度が開発されてきたが、いずれも特性不安を測定することに重点を置いている等の理由により、実際の演奏場面に先立って生じる不安を測定するには、不向きである (吉江・繁柵, 2007)。

【目的】

こうした背景から、本研究は、演奏前に生じる不安を収集した坂内・大石 (2015) の報告に基づいて、演奏場面に先立って生じる不安を測定することのできる演奏不安測定尺度を (Music Performance Anxiety Inventory-13, 以下 MPAI-13) 作成することを目的とする。

【方法】

調査対象者 首都圏にある 4 つの大学で音楽を専攻している大学生 155 名 (男性 37 名, 女性 118 名 : 平均 20.6 ± 1.7 歳) を対象に、2017 年 12 月から 2018 年 1 月に調査を実施した。

測定項目 (1)MPAI-13 : 坂内ら (2015) の先行研究を基に作成した 15 項目からなる質問項目に回答を求めた。項目の作成にあたっては、第一著者と専門研究領域の異なる共同研究者 2 名による内容の協議を行った。さらに、音楽の専門家 10 名に、協議を経て作成された尺度の質問文の明快性などについての確認を依頼した。回答方法は、4 件法 (1 : まったくそうでなかった—4 : まったくそうであった) に設定し、各項目の評定値をその項目の得点とした。指示文は、「直近の人前での演奏場面 (演奏会やコンクールなど) を思い出してください。その際の本番約 1 週間前から舞台に出る直前までの間に、以下の項目はどのくらいあてはまりますか? もっともよく表す数字 1 つに○をつけてください。」とした。(2)演奏時に生じるあがり反応の測定 : あがり反応の測定には、有光・今田 (1999) によって作成されたあがり経験特徴質問紙から先行研究 (Bannai et al., 2016) に倣い、27 項目を抜粋し、使用した。この尺度は、4 件法 (1 : 全くそうでなかった—4 : 全くそうであった) で評価される。(3)抑うつ傾向の測定 : 抑うつ傾向の測定には、日本語版 Center for Epidemiologic Studies Depression Scale (島・鹿野・北村・朝井, 1985) を用いた。この尺度は、20 項目から構成され、4 件法 (0 : ない—3 : 5 日以上) で評価される。(4)SPS の測定 : SPS の測定には、Highly Sensitive Person Scale (HSPS) 日本語版 (高橋, 2016) を用いた。なお本研究では、調査協力者の負担を考慮して、Aron, E., & Aron, A. (2013) による 12 項目版の質問項目を使用した。この尺度は、7 件法 (1 : まったくあてはまらない—7 : 非常にあてはまる) で評価される。(5)自尊感情の測定 : 自尊感情の測定には、自尊感情尺度 (山本・松井・山成, 1982) を用いた。この尺度は、10 項目で構成され、5 件法 (1 : あてはまらない—5 : あてはまる) で評価される。

研究成果の概要 つづき

【方法】

項目の検討 床効果のある項目が2項目、天井効果のある項目が1項目認められた。床効果の認められた2項目は、以降の分析においては除外し、天井効果の認められた項目4については、演奏不安の概念を構成するうえで重要な項目であることから、採択することとした。

探索的因子分析 13項目について、探索的因子分析(最尤法, プロマックス回転)を行った。スクリープロット傾斜と解釈の可能性を考慮して、2因子モデルが妥当であると判断した。第1因子で.80、第2因子で.85、尺度全体で.88を示し、十分な内的整合性が得られた。第一因子は、「きれいな音色が出せるか心配であった」等の項目から構成されていたため、「演奏の質に関する不安」と命名した。第二因子は、「体が震えてしまうかもしれないという不安があった」等の項目から構成されていたため、「演奏することに関する不安」と命名した。

確認的因子分析 確認的因子分析の結果(GFI = .89, AGFI = .84, CFI = .90, RMSEA = .09)、因子の妥当性が支持された。

基準関連妥当性 MPAI-13の合計得点および各下位尺度得点と、各尺度間におけるPearsonの積率相関係数(r)を算出した結果、それらの間に有意な相関が認められた。

【考察】

MPAI-13においては、構成概念妥当性と信頼性が確認された。本調査は、横断的な量的調査を実施したが、今後は、さらに信頼性と妥当性を検討するために縦断的調査が望まれる。

【引用文献】

1. Salmon, P. G. (1990). A psychological perspective on musical performance anxiety: A review of literature. *Medical Problems of Performing Artists*, 4, 77-80.
2. Wesner, R. B., Noyes, R. J., & Davis, T. L. (1990). The occurrence anxiety among musicians. *Journal of Affective Disorders*, 18, 177-185.
3. Wills, G., & Cooper, C. L. (1988). *Pressure sensitive: Popular musicians under stress*. London: Sage.
4. Nagel, J., Himle, D., & Papsdorf, J. (1989). Cognitive-behavioural treatment of musical performance anxiety. *Psychology of Music and Music Education*, 17, 12-21.
5. Cox, W. J., & Kenardy, J. (1993). Performance anxiety, social phobia, and setting effects in instrumental music students. *Journal of Anxiety Disorders*, 7, 49-60.
6. 吉江路子, 繁榊算男(2007). 対人不安傾向と完全主義認知が演奏状態不安に及ぼす影響. *パーソナリティ研究*, 15, 335-346.
7. 坂内くらら, 大石和男(2015). 日本人音楽専攻大学生の抑うつ傾向と演奏不安. *学校メンタルヘルス*, 18, 165-173.
8. 有光興記, 今田寛(1999). 状況と状況認知から見た'あがり'経験: 情動経験の特徴による分析. *心理學研究*, 70, 30-37.
9. Bannai, K., Kase, T., Endo, S., & Oishi, K. (2016). Relationships among performance anxiety, agari experience, and depressive tendencies in Japanese music students. *Medical Problems of Performing Artists*, 31, 205-210.
10. 島 悟, 鹿野達男, 北村俊則, 浅井昌弘(1985). 新しい抑うつ性自己評価尺度について. *精神医学*, 27, 717-723.
11. 高橋亜希(2016). Highly Sensitive Person Scale 日本版(HSPS-J19)の作成. *感情心理学研究*, 23, 68-77.
12. Aron, E., & Aron, A. (2013). TIPS FOR SPS RESEARCH, Retrieved from http://hsperson.com/pdf/Tips_for_SPS_Resarchers_Nov21_2013.pdf (April 25, 2018)
13. 山本真理子, 松井豊, 山成由起子(1982). 認知された自己の諸側面の構造. *育心理学研究*, 30, 64-69.

研究発表 (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

① 査読審査中